

因子分析における共通性および関連する行列の固有値の 推定量の漸近分布について

東京外国語大学 市川 雅 教

1. はじめに

因子分析モデル (Lawley and Maxwell (1971)) のもとで、観測される変数を要素とするベクトル $\mathbf{x}(p \times 1)$ は、 $\mathbf{x} = \boldsymbol{\mu} + \mathbf{A}\mathbf{f} + \mathbf{u}$ と表される。ここで、 $\boldsymbol{\mu}$ は \mathbf{x} の母平均を要素とするベクトル、 $\mathbf{f}(m \times 1)$ 、 $\mathbf{u}(p \times 1)$ はそれぞれ共通因子、独自因子を要素とするベクトルである。 $\mathbf{A}(p \times m)$ の要素 λ_{jk} は、 k 番目の因子に対する j 番目の変数の因子負荷量である。さらに、 $E(\mathbf{f}) = \mathbf{0}$ 、 $E(\mathbf{f}\mathbf{f}') = \mathbf{I}_m$ (m 次単位行列)、 $E(\mathbf{u}) = \mathbf{0}$ 、 $E(\mathbf{u}\mathbf{u}') = \boldsymbol{\Psi}$ (対角・正定値行列)、 $E(\mathbf{f}\mathbf{u}') = \mathbf{0}$ を仮定する。以上の仮定から、 \mathbf{x} の分散共分散行列 $\boldsymbol{\Sigma}$ は $\boldsymbol{\Sigma} = \mathbf{A}\mathbf{A}' + \boldsymbol{\Psi}$ という構造を持ち、 $h_j^2 = \sum_{k=1}^m \lambda_{jk}^2$ とおくと、観測される変数の分散 σ_{jj} は、 $\sigma_{jj} = h_j^2 + \psi_j$ ($1 \leq j \leq p$) と分解される。 h_j^2 は共通因子により説明される部分で共通性と呼ばれ、これに対して ψ_j は独自性と呼ばれる。なお、以下では \mathbf{A} 、 $\boldsymbol{\Psi}$ が識別可能であること、すなわち、 $\boldsymbol{\Sigma}$ の分解が、因子の回転 (\mathbf{A} の右側から直交行列をかけること) の不定性を除いて一意に定まることを仮定する。このとき $\text{rank}(\mathbf{A}) = m$ となる。

2. 再パラメタ化

$\boldsymbol{\Sigma}$ に $\boldsymbol{\Psi}^{-1/2}$ を両側からかけて基準化した行列を $\boldsymbol{\Sigma}^*$ とし、そのスペクトル分解を $\boldsymbol{\Omega}\boldsymbol{\Theta}\boldsymbol{\Omega}'$ ($\boldsymbol{\Omega}'\boldsymbol{\Omega} = \mathbf{I}_p$) とする。 $\boldsymbol{\Sigma}^*$ の小さい方から $p-m$ 個の固有値は 1 となる。いま、大きい方から m 個の固有値は互に異なること、すなわち、 $\theta_1 > \dots > \theta_m$ を仮定し、 $\theta_1, \dots, \theta_m$ を要素とする m 次対角行列を $\boldsymbol{\Theta}_1$ 、 $\theta_1, \dots, \theta_m$ および $\theta_{m+1}, \dots, \theta_p$ に対応するノルム 1 の固有ベクトルを各列の要素とする行列をそれぞれ $\boldsymbol{\Omega}_1, \boldsymbol{\Omega}_2$ とする。 \mathbf{A} から回転の不定性を除くために $\text{non-diag } \mathbf{A}'\boldsymbol{\Psi}^{-1}\mathbf{A} = \mathbf{0}$ とすると、 $\mathbf{A} = \boldsymbol{\Psi}^{1/2}\boldsymbol{\Omega}_1(\boldsymbol{\Theta}_1 - \mathbf{I}_m)^{1/2}$ となり、 $(\mathbf{A}, \boldsymbol{\Psi})$ と $(\boldsymbol{\Omega}_1, \boldsymbol{\Theta}_1, \boldsymbol{\Psi})$ とは等価であることが分る。 θ_k ($1 \leq k \leq m$) は、因子の回転や測定の単位の変更のもとで不変であり、 \mathbf{x} と \mathbf{f} の正準相関係数の二乗を $\nu_1^2 > \dots > \nu_m^2$ とすると $\theta_k = (1 - \nu_k^2)^{-1}$ という関係がある。

3. 母数 \mathbf{A} 、 $\boldsymbol{\Psi}$ の最尤推定量

$\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_N$ を $N_p(\boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{\Sigma})$ (ただし、 $\boldsymbol{\Sigma} = \mathbf{A}\mathbf{A}' + \boldsymbol{\Psi}$) からの独立な観測値とし、 $\mathbf{S} = n^{-1} \sum_{\alpha=1}^N (\mathbf{x}_\alpha - \bar{\mathbf{x}})(\mathbf{x}_\alpha - \bar{\mathbf{x}})'$ ($n = N - 1$) とする。因子分析モデルの母数 \mathbf{A} 、 $\boldsymbol{\Psi}$ の最尤推定量 $\hat{\mathbf{A}}$ 、 $\hat{\boldsymbol{\Psi}}$ は、 \mathbf{S} と $\boldsymbol{\Sigma}$ との「距離」

$$F_{ML}(\mathbf{S}, \boldsymbol{\Sigma}) = \text{tr } \mathbf{S}\boldsymbol{\Sigma}^{-1} - \ln |\mathbf{S}\boldsymbol{\Sigma}^{-1}| - p$$

を最小にするものとして定義される。 $\boldsymbol{\Phi} = \boldsymbol{\Psi}^{-1} - \boldsymbol{\Psi}^{-1}\mathbf{A}(\mathbf{A}'\boldsymbol{\Psi}^{-1}\mathbf{A})^{-1}\mathbf{A}'\boldsymbol{\Psi}^{-1}$ とすると、 $\boldsymbol{\Xi} = \boldsymbol{\Phi} \odot \boldsymbol{\Phi}$ (\odot は行列のアダマール積を表す) が正定値であれば、 $\hat{\phi}_j$ は次のように表される (Anderson and Rubin (1956))、

$$\hat{\phi}_j = \psi_j + \sum_{i=1}^p \sum_{g=1}^p \sum_{h=1}^p \xi^{ji} \phi_{ig} \phi_{ih} (s_{gh} - \sigma_{gh}) + O_p(n^{-1})$$

一方 $\hat{\mathbf{A}}$ は、 $\mathbf{S}^* = \hat{\boldsymbol{\Psi}}^{-1/2} \mathbf{S} \hat{\boldsymbol{\Psi}}^{-1/2}$ の最大 m 個の固有値を要素とする対角行列 $\hat{\boldsymbol{\Theta}}_1$ と、対応するノルム 1 の固有ベクトルを各列の要素とする行列 $\hat{\boldsymbol{\Omega}}_1$ により $\hat{\mathbf{A}} = \hat{\boldsymbol{\Psi}}^{1/2} \hat{\boldsymbol{\Omega}}_1 (\hat{\boldsymbol{\Omega}}_1 - \mathbf{I}_m)^{1/2}$ と表せる。 N

$\rightarrow \infty$ の場合に s_{ij} は正規分布にしたがいがい、 $n \text{Cov}(s_{ij}, s_{gh}) = (\sigma_{ig}\sigma_{jh} + \sigma_{ih}\sigma_{jg})$ ($1 \leq i, j, g, h \leq p$) となる。したがって、 $\boldsymbol{\psi} = (\psi_1, \dots, \psi_p)'$ とすると、 $\sqrt{n}(\hat{\boldsymbol{\psi}} - \boldsymbol{\psi})$ は漸近的に $N_p(\mathbf{0}, 2\boldsymbol{\Sigma}^{-1})$ にしたがう。

4. 共通性の推定量の漸近分布

因子分析の結果の解釈にあたっては、共通性がいろいろな目安になるが、共通性の推定量の分布については報告されていない。さて、 $\hat{h}_j^2 = \sum_{k=1}^m \hat{\lambda}_{jk}^2$ とすると、 $s_{jj} = \hat{h}_j^2 + \hat{\psi}_j$ ($1 \leq j \leq p$) という関係が成立し、 s_{ii} と $\hat{\psi}_j$ の漸近共分散が $n \text{Cov}(s_{ii}, \hat{\psi}_j) = 2\delta_{ij}\psi_j^2$ (ただし δ_{ij} はクロネッカーのデルタ記号) となることを用いると、

$$n \text{Cov}(\hat{h}_i^2, \hat{h}_j^2) = n \text{Cov}(\hat{\psi}_i, \hat{\psi}_j) + 2(\sigma_{ij}^2 - 2\delta_{ij}\psi_j^2) \quad (1 \leq i, j \leq p)$$

が得られる。この関係は、重みなし最小二乗法、単純最小二乗法 (丘本 (1986) を参照) などについても成立する。上式より、 $\sigma_{jj} > \sqrt{2}\psi_j$ 、すなわち、 $*h_j^2 = h_j^2/\sigma_{jj} > 0.292\dots$ の場合には、 $V(\hat{h}_j^2) > V(\hat{\psi}_j)$ となるので、 $V(\hat{h}_j^2)$ を $V(\hat{\psi}_j)$ で代用すると過小評価になることが分る。

5. θ_k の推定量の漸近分布

$\hat{\boldsymbol{\Sigma}}^* = \hat{\boldsymbol{\Psi}}^{-1/2} \hat{\boldsymbol{\Sigma}} \hat{\boldsymbol{\Psi}}^{-1/2}$ の k ($1 \leq k \leq m$) 番目の固有値は S^* の k 番目の固有値に一致し、また、 θ_k, ω_k の最尤推定値 $\hat{\theta}_k, \hat{\omega}_k$ は、 \mathbf{x} の測定の単位の変更のもとでも不変である。 $\mathbf{V} = \mathbf{A}' \boldsymbol{\Psi}^{-1} (\hat{\boldsymbol{\Psi}} - \boldsymbol{\Psi}) \boldsymbol{\Psi}^{-1} \mathbf{A}$ 、 $\mathbf{W} = \mathbf{A}' \boldsymbol{\Psi}^{-1} (\mathbf{S} - \boldsymbol{\Sigma}) \boldsymbol{\Psi}^{-1} \mathbf{A}$ とする。 $\boldsymbol{\Sigma}$ が正定値であれば、

$$\hat{\theta}_k - \theta_k = \frac{1}{\theta_k - 1} w_{kk} - \frac{\theta_k}{\theta_k - 1} v_{kk} + O_p(n^{-1}) \quad (1 \leq k \leq m)$$

と表される。したがって $\sqrt{n}(\hat{\theta}_k - \theta_k)$ は、漸近的に平均 0 の正規分布にしたがいがい、 $\hat{\theta}_k$ と $\hat{\theta}_l$ ($1 \leq k, l \leq m$) の漸近共分散は

$$n \text{Cov}(\hat{\theta}_k, \hat{\theta}_l) = 2\delta_{kl}\theta_k^2 + 2\theta_k\theta_l(\boldsymbol{\omega}_k \odot \boldsymbol{\omega}_l)' \{(\boldsymbol{\Omega}_2 \boldsymbol{\Omega}_2') \odot (\boldsymbol{\Omega}_2 \boldsymbol{\Omega}_2')\}^{-1} (\boldsymbol{\omega}_l \odot \boldsymbol{\omega}_l)$$

となる。 $\hat{\theta}_k$ の漸近標準誤差を $\sigma(\hat{\theta}_k)$ とすると、 $\sigma(\hat{\theta}_k)$ が相対的に大きい因子を含むような負荷量行列は、不安定であると考えられる。実データでは、Akaike (1987) の指摘する共通性の特異的な増加が見られる場合に、対応する $\hat{\sigma}(\hat{\theta}_k)$ が相対的に大きくなる。

参 考 文 献

- Akaike, H. (1987). Factor analysis and AIC, *Psychometrika*, **52**, 317-332.
 Anderson, T.W. and Rubin, H. (1956). Statistical inference in factor analysis, *Proc. Third Berkeley Symp. on Math. Statist. Prob.*, Vol. 5, 111-150, Univ. of California Press, Berkeley.
 Lawley, D.N. and Maxwell, A.E. (1971). *Factor Analysis as a Statistical Method*, 2nd ed., Butterworth, London.
 丘本 正 (1986). 『因子分析の基礎』, 日科技連, 東京.